

「潟」における背景

— 「マレーもの」の原点 —

The Background of "The Lagoon": The Origin of Conrad's Malayan Stories

渡 辺 浩

1. はじめに

コンラッド (Joseph Conrad, 1857 - 1924) の「潟」 ("The Lagoon", 1897) は『不安にまつわる物語』 (*Tales of Unrest*, 1898) に納められている短編の一つであるが、単純なプロットと幻想的な雰囲気とを湛えるコンラッドらしい作品と言える。内容はマレー地方のある土着民の部落近郊にある潟が舞台で、そこに住むアーサット (Arsat) という現地人の水上小屋を白人の「私」が訪れて、その身の上話を聞くという設定となっている。コンラッドの作品群に関しては、その舞台背景に基づいて「マレーもの」や「アフリカもの」、またその他に南米やヨーロッパを舞台にした作品等に分けられる。特に初期の作品群に関しては処女作の『オールメイヤーの阿房宮』 (*Almayer's Folly*, 1895) や『島の流れ者』 (*An Outcast of the Islands*, 1896)、『ロード・ジム』 (*Lord Jim*, 1900) また短編集『不安にまつわる物語』に納められている「カレイン」 ("Karain: A Memory", 1897) やこの作品「潟」など、かなりマレー地方を舞台とする作品が目立つ。また晩年になって完成された『救助』 (*The Rescue*, 1920) などもマレー地方を舞台にした作品で、初期に書き出されて未完のまま長年放置されていたものを、かなり後になってコンラッドが完成させたものである。

こうしてみるとコンラッドの作家人生の初期は、かなりマレー地域の興味と題材で占められていることになる。この論考で取り上げる「潟」については、そうした作品群の中でも一番短くシンプルな作品と言える。しかしその後続く作品群の中に見受けられる特徴や作家の作風が、すでにかなり顕著な形として表現されている。そうした意味で、この作品がコンラッドの「マレーもの」の原点ともなりプロトタイプと見なされる特徴を備えていると考えられる。またその中のいくつかは、「マレーもの」以外の作品群にも当てはまる作風を暗示し、ある意味では作家の原点を示す作品とも言えよう。コンラッド自身、『不安にまつわる物語』の序文において以下のように述懐している。

Of the five stories in this volume *The Lagoon*, the last in order, is the earliest in date. It is the first short story I ever wrote and marks, in a manner of speaking, the

end of my first phase, the Malayan phase with its special subject and its verbal suggestions. Conceived in the same mood which produced "Almayer's Folly" and "An Outcast of the Islands," it is told in the same breath (with what was left of it, that is, after the end of *An Outcast*), seen with the same vision, rendered in the same method—if such a thing as method did exist then in my conscious relation to this new adventure of writing for print. (Author's Note to *Tales of Unrest*, v)

序文の中でこの短編「渦」は『オールメイヤーの阿房宮』や『島の流れ者』と同じ気持ちと手法で書かれたものであることを吐露している。そして実際上記の二作品の直後に「渦」は執筆されている。そうした意味で「渦」は「マレーもの」の精神風土を示すつもりで書かれている部分もあるのではと推察される。このような背景を踏まえて、この論考においては、「渦」が他の「マレーもの」の作品群と比べて、どのような点がプロトタイプとしての特徴を示し、また原点となっているのかという問題を分析するものである。

2. 場面の孤立性

マレーに関する物語においてとくに読者の目を惹きつけるものは、印象的な熱帯雨林の風景と言えるであろう。アフリカものに登場する暗黒の密林とは別の異文化を育むような、不思議な密林と環境が常に物語にともなっている。

The forests, sombre and dull, stood motionless and silent on each side of the broad stream. At the foot of big, towering trees, trunkless nipa palms rose from the mud of the bank, in bunches of leaves enormous and heavy, that hung unstirring over the brown swirl of eddies. In the stillness of the air every tree, every leaf, every bough, every tendril of creeper and every petal of minute blossoms seemed to have been bewitched into an immobility perfect and final. (187)

こうした雰囲気は当時の異国を舞台としたロマンスに特徴的なことであり、またコンラッド作品にもある程度はその手法が窺える部分がある。しかしコンラッドの場合は、外界と隔絶した場面を描くことが、登場人物達の心理をより深く鮮明に描写することに寄与し、ひいては物語全体の輪郭を鮮やかに浮かび上がらせる効果をあげていると考えられる。この点に関してヨー (Agnes S. K. Yeow) は以下のように分析している。

Arguably, Conrad's Eastern fiction is his means of imagining a world into being, and, in so doing, establishing its boundaries. This imaginary world, ostensibly Malay,

is effectively a fictional intervention in the accumulative Western construction of the East and the proliferation of meanings attached to it. The East that Conrad writes about is not only the product of its strategic location at the confluence of major civilizations and the crossroads of early modern globalization but also the result of vast political, economic, and social changes in the region itself in the last quarter of the nineteenth century.(2)

コンラッド的な異国情緒と圧倒させるような自然描写は、様々な意味で異文化との遭遇と軋轢といった広い解釈に結びつく意図を秘めているのである。ある意味でコンラッドの作品は心理小説的な部分が要諦を占めていると言っても過言ではない。その効果を引き出すための手段として場面の孤立性という点に注目するならば、「マレーもの」に関する場面設定はある程度納得のゆくものとなり、また他の作品群にもその心理小説としての手法の一つとして当てはまるわけである。『オールメイヤーの阿房宮』におけるサンバー (Sambir) の部落、また 『ロード・ジム』のパトゥーサン (Patusan) も同様の設定と言えよう。また南米を舞台とした『ノストローモ』 (*Nostramo*, 1904) のスラコ (Sulaco) の町、さらには「エミー・フォスター」 ("Amy Foster", 1901) におけるイギリスの片田舎の港町コールブルック (Colebrook) もしかり、ひいては海洋を舞台とした『ナーシサス号の黒人』 (*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897)、「青春」 ("Youth", 1898) や「台風」 (*Typhoon*, 1902) に見られる、閉ざされたあるいは孤立した船上の環境、『密偵』 (*The Secret Agent*, 1907) におけるロンドンなどの都会も一つの孤立した環境舞台としての役割を果たしていると解釈できる。

3. 異文化の問題と土着性

コンラッドの作品の全般を考える場合、異文化との遭遇と軋轢という問題が真っ先に頭に浮かぶ。彼の出自の特殊性による異文化の問題は常に指摘されることであるが、「マレーもの」における異文化、特に西欧世界から見た場合の特殊性、言葉を換えれば土着性というものが常に色濃く描かれているように思われる。そうした文明論に関連した分析としてマクロー克蘭 (Juliet Mclauchlan) は以下のように考察している。

Before considering Conrad's fiction, we should look briefly at some contemporary thoughts on civilization. We now use the word with an irony hardly less consistent than Conrad's, having become ever more skeptical about the degree of civilization which we may have attained and about "our" right or ability to civilize anyone else—if we accept a somewhat patronizing dictionary definition of "civilize" as "to reclaim from barbarism." What *is* barbarism? For that matter, what is civilization? Are we

civilized? Despite uncertainties, we do tend to cling to some positive sense of civilized values, reflecting perhaps a more idealistic definition: "to instruct in arts and refinements."(58 下線筆者)

コンラッドが文明的なことや文明化ということに関して懐疑的であったことは多くの作品に窺えることである。そしてそのことが西欧とその他の文明との対照的描写に繋がっていることは確かである。とにかくコンラッドの物語に関しては、閉ざされたそして孤立した環境が大きな意味を持つことには間違いない。そしてそうした特殊な環境を作り出すことにより、その世界における一つの特殊な秩序を作り出せるという点が指摘できる。『オールメイヤー』においては、オランダ人商人の主人公（オールメイヤー）がサンパー部落の住民達の文化・風俗を最後までうまく見抜けぬために悲劇が起こる状況となっている。地域的に土着民達はイスラムを信仰しており、西欧人達とは明らかに異なる習俗をもち、植民地支配を行う西欧人に対して反感と違和感を抱く状況から物語は始まっている。現地人妻との間に混血の娘ニーナ (Nina) をもうけ溺愛するが、最終的に彼女は現地人の酋長の息子デイン (Dain) と駆け落ちをして親を裏切る結末となる。常にこうした西欧文明と土着の文化との葛藤やせめぎ合いがテーマとなっているのが「マレーもの」の特徴である。それは植民地支配という緊張した状況の中で、東洋と西洋が、ある意味で多少なりともお互いの理解があるにもかかわらず、反発と憎しみが交じり合っている状況を巧みに描き出す設定と言えよう。そうした心理的なバランスと機微がうまく描かれる背景が用意されている。

また『ロード・ジム』においても一度はパトゥーサンで住民達とうち解け、信頼を得たかと思われたジムが、最終的に現地人の娘ジュエル (Jewel) との実らぬ恋愛や酋長ドラミン (Doramin) との誤解から悲劇をむかえる結末となる。とにかく「マレーもの」に関しては、そうした西欧人と土着民達との異文化同士の誤解や軋轢が大きなテーマの一つとなっている。

さて「渦」においては物語を語る「私」自身が西欧人という設定で登場し、現地人達からも不気味に思われているアッサートという土着人の住む渦を訪れるという状況になっている。ある日「私」は商売の帰りに遅くなり、仲間と一緒にアッサートの住む渦の上に建つ小屋を訪れ一夜の宿をこうところから物語は始まる。しかしアッサートは本来その地に流れてきたよそ者であり、一人不気味な渦の上で、得体の知れぬ精たちと交わる奇妙な人物と見なされていた。そこで他の現地人たちは小屋に入らず、「私」のみが入り、アッサートの身の上話を聞くことになる。フレーザー (Gail Fraser) によるとこの作品での語りの手法は、初期作品でありながら、コンラッド的な創意が窺えることを指摘している。

When we look at his own writing from this perspective, we can see that some of the

earlier short fictions served as testing grounds for the very techniques that make his work recognizably 'Conradian'. In 'An Outpost of Progress', for example, he exploited grotesque images and sudden shifts in perspective to create an ironic style that sets him apart from Flaubert and Maupassant. Almost simultaneously, in 'The Lagoon', he experimented with a more searching and ambiguous version of the 'teller and listener' narrative method favoured by Turgenev in his shorter works. (28)

この分析で述べられているように、確かにアイロニーを含む手法は、会話を印象的にする効果を強めている。アッサートが瀕に移り住むようになった経緯は、以前仕えていた統治者シ・デンドリング (Si Dendring) の侍女の一人ディアメレン (Diamelen) を弟と一緒に奪い取ってしまうという事件を起こしたことが発端であった。その時に弟は死に、アッサートは大きな悔いをのこしている。そして最愛のディアメレンも「私」が訪れた時には死の床にあり、アッサートが身の上話を語り終えた早朝に彼女が息を引き取るという結末をむかえる。この物語は大変短いプロットの中で「マレーもの」の特徴が良くまとめられている。

先ほど述べた通り、ごく限られた空間に場面が設定されている点がコンラッド作品の特徴であり、この話の場合は、とくに村や部落などよりもさらに狭いアッサートの小屋で話しが展開されていること、またほんの一晚の物語であることなどが、「私」とアッサートの語りと心理をより鮮明に、そして印象的にしている効果がある。

こうしてみるともう一つの短編「カレイン」のストーリーとも相通じる要素がある。「カレイン」も白人達と土着民カレイン (Karain) との心の交流を描いた作品であるが、最終的にどうしても異文化の理解しがたい神秘性を湛えている。ある程度理解し合えた異文化に属する人物達が、最終的にお互いの知り得ない神秘に阻まれる内容も「マレーもの」の特徴と言えよう。

4. 秩序と反秩序の問題

コンラッドの作品に関しては文明の意味自体に疑問を投げかける部分が多々ある。「カレイン」のストーリーに関しても物語の最後の部分で、「私」あるいは「私たち」が住む大英帝国の文明やその行く末を危惧する場面が提示されたり、また「闇の奥」に関してもロンドンの夕暮れの場面に関してマーローが闇のイメージと重ね合わせるようなナレーションを加える部分が登場する。こうした意味で「文明」とは、あるいは「文明の進歩」とは何かを常に問いかける態度が見受けられるわけであるが、こうした姿勢に関しても異文化の比較や相克という部分に対して意味をもってくるわけである。コンラッドにおける都市と熱帯地方の比較の意義についてワッツ (Cedric Watts) は以下のように分析している。

Against the turbulence, overcrowding, noise, ugliness, confusion and squalor associated with the city, Karain's picturesquely tropical world with its archaic values (simple heroism and leadership, passionate actions and betrayals, superstitious credulities) seems "more real" aesthetically, ontologically and morally better.(22)

物語の孤立した世界という描き方により、その世界や登場人物たちが一つの閉ざされた秩序や考え方をもつに至り、そこで一つの確立した営みや考えが存在することになる。「潟」の場合も、潟という一つの孤立した世界、またさらに現地の人々に土着の霊が住み着いている不気味な世界として描かれ、そこに住む気味が悪い人物の物語という設定になっているが、それ故に独立した興味深い話が発生するわけである。

アーサットが流れ者のような生活を始めたのも自分の主人を裏切るような行いをした結果であるが、彼ら兄弟もそれが自分たちの一族にとっては英雄的な行為であると信じている。そうした狭い世界での一種の秩序が作り出され、当事者達は自分の行為や生活にある程度納得し、あるいは慣れてしまっている。以上のような背景に文化・異文化の要素が持ち込まれている点がコンラッドの特色と言えよう。「潟」についての特色をカール (Frederick R. Karl) は以下のように述べている。

"The Lagoon," published six months after "An Outpost," is, according to Robert Wooster Stallman, Conrad's first symbolic work; but according to Conrad it is of the same stuff as his two Malayan novels. The narrative of passion, a man and woman escaping from responsibility in an attempt to find pure love, takes up where Willems and Aïssa left off. Conrad's early theme, that a man caught in passion loses his manhood—a condition characterized by loss of courage, loyalty, and responsibility—is familiar from *An Outcast* and is repeated in "Karain," the fifth story in the volume. (118)

ある種の情緒的な要因に主人公がとらわれて常軌を逸脱してゆく流れはコンラッド作品の多くに見られる傾向である。そして当事者達はそれに気づかぬ傾向がある。こうした特徴は「アフリカもの」に関しても色濃く登場する特色でもある。「文明の前哨地」("An Outpost of Progress", 1897) に関しても、二人のベルギー人がアフリカのコンゴにおいて貿易会社の派出所に取り残され、ついには様々な事件に巻き込まれて自滅してゆくストーリーとなっているが、西欧文明に基づく常識をもって生活していた二人が、別の時限の文明や考え方、常識というものが存在していることに気づかずに、次第に自分たちの常軌を失ってゆくのである。こうしたモチーフはさらに発展して「闇の奥」のクルツの生き方、

本来は大変有能な国際人、また西欧のエージェントとしてのアイデンティティーをもつ主人公がアフリカの闇として描かれる異文化の中で発狂するのである。「文明の前哨地」に関する特色についてダウデン (Wilfred S. Dowden) は次のように言及している。

In "An Outpost of Progress," Conrad was not bound by the depiction of the two derelicts who were left as agents at the trading post. In this short narrative, he enjoyed the advantage of a larger subject than their downfall; the problem of colonial expansion gave him a richer theme that called for deeper and more complex imagery. (35)

上記の作品は象徴的なアイロニーが使われている作品であるが、作品の裏に大きな文化・政治にまつわるテーマが秘められていることが窺える。こうした特色は個人のレベルでもまた地域のレベルでも発生する内容であり、顕著な例としては「エイミー・フォスター」などをあげることができる。イングランドの小さな港町の田舎娘エイミー (Amy) が、ポーランド出身と思われるこちらも田舎の青年ヤンコー (Yanko) と偶然出会うことになり、結婚生活を通じて一度はある程度お互いに理解できたかに思われた。しかし、最終的に異文化と言葉の壁に阻まれ、誤解が生じてヤンコーの死に至る悲劇である。これは異文化の違いという部分が、純粋に個人同士の誤解という部分に転化されたケースであると考えられる。

「渦」の場合においては、アーサットとその弟という一族の考え方、自分の信念を押し通すことが英雄的な行為と信じている二人が、他の部族にとっては裏切りという行為に見なされ、孤立する話である。これも一つの異文化における軋轢であり、それを聞いている白人の「私」にとっても異文化の話ということになる。ある意味ではそうした幾重にも重なる文化的な軋轢の物語と言えよう。そしてそれぞれの文化を代表する者たちは必ず自分たちが信じる秩序のようなものを持っているわけである。また別の見方をすれば、ある考え方や信念というものが秩序となって現れ、またそれを信じる行為が当事者や出身地の独自性と文化を強力に打ち出す働きをしているとも言える。

こうした問題に関しては異文化に加えて異質な思想も重要である。例えばコンラッドの場合は、自分が所属する同じヨーロッパを舞台とした作品も多く手がけているが、印象的な作品としては『密偵』 (*The Secret Agent*, 1907) と『西欧人の眼に』 (*Under Western Eyes*, 1911) があげられる。両作品ともロシア革命直前のヨーロッパにおけるアナキズムとテロリズムの不条理を扱った作品であるが、登場人物達の心理を描写する部分で優れた内容を含む作品と言えよう。前者『密偵』に関してはフランス人の父親をもつという風采のあがらない主人公ヴァーロック (Verloc) が、中途半端な二重スパイの活動がもとで悲劇的な最後をむかえるストーリーである。ロンドン市内という西欧文明のまっただ中におい

て、ロシア大使館のエージェント等の異文化の要素も登場するが、この作品の大きなテーマはコンラッドが嫌っていたアナキズムの糾弾である。その愚かさや無秩序を描写することに関して作家の巧みなプロットが展開されている。後者の『西欧人の眼に』に関しては、ロシアで社会的な出世を望む真面目な学生ラズーモフ (Razumov) が、ふとしたきっかけでテロリスト仲間と勘違いされ人生の軌道を外れていく物語である。双方ともコンラッドの嫌うロシア的な異文化が登場するが、先ほども述べた通りアナキズムに対する告発が主要なテーマとなっている。それはいずれにしてもコンラッドにとって受け入れがたい異質なものであった。

In *The Secret Agent*, Conrad presents the anarchists as grotesques, parasitic, and physically or temperamentally unfitted for decent work. Their apparent desire to destroy society coexists with their dependence upon the charity and support of the women in their lives: Michaelis depends upon his 'Lady Patroness', Yundt on an 'indomitable snarling old witch', and Ossipon on each young woman he seduces.

(*Oxford Reader's Companion to Conrad*, 13)

コンラッドの糾弾の手法は理論ではなく不気味なもの、不格好なものの描写から始まることが常である。ここで大切な点は、作家が感じている異質なものがテーマとなっている点である。上述した通りコンラッドの作品には異文化同士の遭遇と軋轢の中で悲劇に陥ってゆく主人公達が描かれ、またそのプロット自体がコンラッドらしさを演出してゆく様子が窺われる。しかし上記の政治小説的な内容を含む二作品に関しては、異文化という要素以上に作家が感じていた異質なものをテーマに掲げている。そうした広い意味でコンラッドの世界は、作家にとって異質なものあるいは異物に対する関わりと分析、糾弾というものがテーマになっている傾向が窺われる。そうした異なるもの同士の遭遇と軋轢がお互いの存在の確認となり、また異質な秩序の確認となり、そしてある場合にはどちらかの批評や糾弾に結びつき、またある場合には反省や理解を促すきっかけともなるのである。トーマス・マン (Thomas Mann) は早くも1926年の *Secret Agent* に対する序文の中で、コンラッドの自由に対する希求と抑圧に対する強い嫌悪を強調している。

Conrad's objectivity may seem cool; but IS a passion—a passion for freedom. It is the expression of the very same love and passion that drove the young Pole to sea; and that—as once in the case of Ivan Turgenev—was doubtless the profoundest motive of his cultural relations with the West. This love of freedom cannot be confused with bourgeois liberalism, for he is an artist; and it is far too robust to be classed as aestheticism. (9)

明らかに秩序、就中、社会秩序を乱すものへの嫌悪が表明されているのである。

5. 異文化における誤解

前述した通りコンラッド作品に関しては、主に異文化におけるもの同士の誤解がつきまわっている。「渦」においてもアーサットと弟の一族における価値観とその他の部族との価値観が異なる部分から悲劇が生じていると言えよう。この特徴はこの作品が納められている短編集『不安にまつわる物語』の中の幾つかの作品に共通して見出される。特に異文化との遭遇を扱った「カレイン」と「文明の前哨地」に関しては登場人物達の思いこみや幻想が悲劇への展開に大きく寄与している。

「渦」と多くの共通的な要素をもつと思われる「カレイン」に関しては、主人公カレインがイギリス人の「私」あるいは「私たち」と（密貿易と思われる）商売上の取引相手であり、ある部落の英雄的な酋長という設定になっている。その英雄的な彼が精神的な弱点をもっていることが分かる。ある日彼は私たちの前から行方不明になり、その後しばらくしてやつれた姿で再登場する。彼は昔、親友のマターラ (Matara) と一緒に、白人のもとに走った彼の妹を罰するために旅に出かけた。彼は旅の途中でその妹に恋愛感情を抱き、彼女も自分に好意をもっているという幻想を抱くのである。妹を見つけた瞬間に、彼女を成敗しようとした親友を誤って撃ち殺してしまうという間違いを犯す。それが精神的な負担となりいつまでも親友の霊に悩まされる。しかしある時出会った占い師の老人に救われ、それ以来その老人が彼の片腕となっていたが、その老人が死んでしまったために再び精神的な苦難に陥るというストーリー展開である。カレインの精神状態についてハンフリーズ (Reynolds Humphries) は以下のように指摘している。

The literal project of the text must show that, although it is the narrator who refers to Karain's 'illusions', Karain himself implicitly, by the form of his own narration, confirms such a vision of himself. During the search for Matara's kidnapped sister, Karain shows himself obsessed and possessed by the young woman; he sees her image everywhere and cannot tell reality from fantasy. (159)

不条理な話から生じる精神的な不安を描く展開に関しては「文明の前哨地」も同様で、西欧文明があらゆる面で優れていると幻想を抱いていた二人の白人が、最終的に自分たちの価値観が全く通用しなくなる状況に追い込まれ、最後にお互いを殺しあう結末をむかえる。こうした極限状態に追い込まれた人間心理を巧みに描き、あるいは巧みに利用して異文化の中の誤解に悲劇性をもたせる手法は、コンラッドならではの技と言える。「カレイン」

の場合には、最後に彼の精神的な危機を救うためにヴィクトリア女王の肖像が描かれた銀貨をお守りにしてカレインに渡すという場面が登場するが、これは少し滑稽な要素も含まれているにしても、誤解というテーマに関しては頷ける部分である。

また『オールメイヤー』に関しても、主人公のオールメイヤーは確かに多少奇妙な性癖のある人物であった。実際にコンラッドはエッセイ集『個人的記録』(*A Personal Record*, 1912)の中でボルネオにおいてオールメイヤーなる人物に会っていることを告白している。実際に少し奇妙なところがあるオランダ人オールメイヤーが異文化の中で西欧流のやり方で商売をするが、現地の商人に裏をかかれたり、またイギリス軍が進駐してくるといふ噂話を真に受けて白亜の商館を建てる。しかしあてがはずれてイギリス軍がやってくることはなく、結局オランダ人によってその建物が「オールメイヤーの阿房宮」(Almayer's Folly)と渾名されるという愚行が描かれる。しかしストーリーのメインテーマは、自分のやり方や流儀が正しいと信じ込んでいる主人公の悲劇であり、結局一番に目をかけていた混血の娘ニーナまでもが彼を裏切り、現地の酋長の息子デインと駆け落ちをしてしまうという結末をむかえる。それは西欧的また自己中心的な価値観が、自分の最も愛していた娘に裏切られたことにより全く否定されたという証になるのである。こうした意味で異文化との遭遇と誤解が悲劇を生むパターンは、この「マレーもの」を中心に確立されたと言える。『オールメイヤーの阿房宮』の続編(しかし内容的にはさかのぼる物語)『島の流れ者』に関しても物語は、主人公の怠惰で優柔不断な白人ウィレムズ(Willems)が混血の娘アイサ(Aïssa)の誤解にあい殺されるという悲劇である。

「マレーもの」の中でも一番の傑作と考えられる『ロード・ジム』においても、土着民部落パトゥーサンにおいて主人公ジムは一番の信頼を勝ち得て、また地元民を良く理解していたと錯覚し、ある意味では幻想を抱いた彼が、結局その過信のために破滅に追い込まれてしまう。ジムの場合は彼が最も英国人らしいと考えていた船乗りになるために船員養成所に入るが、そこで最初の挫折を経験してしまう点に、すでに人生における挫折が暗示されている。物語においては前半の船員としての人生と後半のパトゥーサンの生活とはっきり二分され対比されることにより、さらにこの異文化の問題と誤解がクローズアップされていると言える。この点に関してゴークウィルト(Christopher GoGwilt)は以下のように分析している。

Lord Jim perhaps best illustrates the shift in imperial imaginings I have been tracing through Conrad's Malay fictions, a shift from the dominant nineteenth-century European discourses of Orientalism to the twentieth-century idea of the West. There is, one might say, a powerful connection between the decline of the British Empire and the rise of the West. With the failure to consolidate a coherent ideology of the British Empire, the idea of "the West" emerged to replace and resituate a range of

すなわち『ロード・ジム』においてはすでに西欧の存在が、英国の独占的な存在から西欧全体の存在に移って来ている点を指摘している。そうした象徴的な存在感の変化も考慮する必要がある。「渦」においては「カレイン」と同様に白人の「私」が話の聞き役に徹している。部族的な考えや掟が全てに優先するような発想とか、主人に仕えることの使命感の重さという前提が土着的なイメージを強固なものにしているが、現地人アーサットが主人公となっている点は、カレインと同様に比較的に特殊な例と言えるかもしれない。たいていの場合は、西欧人の主人公が異文化の中で事件に巻き込まれ悲劇に陥るケースが多いからである。しかしそのような場合においても忘れてはならない点は、必ず主人公達が特殊な事件に巻き込まれたり、何らかの形で地元の人々や文化からも孤立したような状況に追い込まれる点である。「カレイン」の場合には妄想に取り憑かれた主人公が親友を殺し、霊に悩まされたり不思議な占い師に救われるといった超常的な体験が語られる。同様に「渦」においては、弟の死から始まる放浪の旅と最終的に妻の死をむかえる不気味な一日という設定が特殊な背景を作り出している。

「エイミー・フォスター」における場合にも一度は分かり合えたと感じた二人に、命にかかわる極限的な段階で文化的な誤解というものが生じてくる。「カレイン」の場合も危険な商売の取引を通じてお互いにかなり理解していたはずの両者が、意外にもカレインの精神的な問題を知り驚くのである。西欧人側の「私」はカレインに対して現地の力強い英雄としてのイメージを抱き、カレインは私たちが幻想や霊的なものを信じない合理主義者だと思いこんでいる。そしてヴィクトリア女王を一種の呪術的な世界を支配していた自分の母親の姿と重ねあわせて崇めており、最後にその姿を刻印したコインを魔よけのお守りとして受け取り精神的な救いとなる。西欧人からもらったお守りという経緯は滑稽であるが、彼らはイギリスに帰国後、自国の文明やその行く末に懐疑的になる様子が描かれる。このように単なる文明や文化の軋轢だけではなく、そうしたものが与える波及効果や影響というものを描き、様々な面で読者にも疑問を投げかけ懐疑的な視点を提供する部分はコンラッド的であると言える。

「渦」においてはもちろんアーサットの個人的な奇行が、彼を孤独な境涯に貶めているが、白人の「私」に対しては協力的であり、かなり命がけの争い事に関しても手助けをしてくれた経緯が語られる。そうした意味では二人はかなり分かり合った間柄と言える。しかし「私」が彼の細かな身の上を知ったのは、この物語が語られる日において初めてのものであった。アーサット自身、自らの部族の掟に忠実であったために主人を裏切ることになり、また周囲の人々の誤解を招く結果となる。白人の「私」も彼をある程度理解し信頼していたが、この身の上話から彼のミステリアスな部分、理解しがたい部分があることが分かる。これも一種の異文化における誤解とも言える。この日の話は、アーサットがかなり前に弟

と二人でディアメレンを連れ去り、その時弟が殺されて見殺しにしまった顛末と、今彼女が死の床についている経緯である。そこで「私」は、彼が宿命的に背負っている価値観や人生観を見て取り、そうした生い立ちにおける一種の土着的な文化の背景が、彼の運命的な悲哀をもたらしていることに気づくのである。

6. 物語における裏切りの構図

コンラッド作品全体を見ると、上述の誤解のテーマと裏切りの構図が折り重なって登場するケースが多い。「マレーもの」の作品群を繙くと、その殆どがこの裏切りの要素を含んでいることが分かる。しかし主人公やそれに準ずる人物達が意図的に裏切りを行う場合は少ないのである。多くの場合、上述の異文化的な軋轢や環境の中で追いつめられて、仕方なく裏切りを行う場合が殆どである。ピーターズ (John G. Peters) は「潟」と「カレイン」を同類の作品であることを認め、後者をより発展した内容と解釈している。

"Karain; A Memory" is the more elaborate of the two tales. Like "The Lagoon," "Karain" considers the theme of betrayal and the relationship between the Western and non-Western worlds. Also like "The Lagoon," "Karain" is one of Conrad's earliest frame narratives, albeit a more sophisticated one that anticipates Conrad's later important frame narratives. (49)

カレインの場合も妄想に駆られて女性を愛するあまり、とっさに親友のマターラを撃ってしまうのである。オールメイヤーにしても、彼はどちらかといえば裏切られる立場ではあったが、混血の娘ニーナの両文化にまたがる苦悩をあまり理解してはいない。そして自分の価値観が絶対であると信じている。そうした意味では周囲の人々の価値観や可能性を裏切っていることになる。結果としてその反動が彼に対する裏切りという形で現れたとも解釈できる。ジムに関しても彼は二度の裏切りを行う。はじめはパトナ (Patna) 号において乗客を置き去りにしてボートに飛び乗ってしまったことであるが、これは彼が生来持つ臆病な自分に気づいていなかったことが原因である。二度目はパトゥーサンの部落で悪漢ブラウン (Brown) と勇気を持って闘わなかったことであろう。このことが最終的な悲劇へと繋がってゆく。『島の流れ者』に登場するウィレムズに至ってようやく意図的に裏切り行為を行う悪人が登場することになるが、彼とて自分がさして悪いことをしているという自覚がなく、あくまでも運命のいたずらにより窮地に陥っただけであると思ひこんでいる。

このように見ると誤解から生じた行き違いが、様々な形をとって裏切りという結果に繋がっていることが分かる。コンラッド作品を繙くと一種の運命観や摂理的なものが漂っていることが分かる。世の中の動きと言うものが全て調和がとれるように仕組みられ、またそ

れに応じて人は生きなくてはならないという思想的なものを表明する態度が感じられる。『ナーシサス号の黒人』の序文にも描かれている通り、コンラッドはある種の摂理的なものを重ねる考えがあったようである。バッチェラー (John Batchelor) はこの点を以下のよう分析している。

The Preface to *The Nigger of the 'Narcissus'* (written some six months after Conrad had finished the novel to which it is prefatory) is often taken as Conrad's artistic credo, and it uses phrases comparable with those in the letters to Noble (stressing, for example, the word 'temperament'), and tells us that the artist is alone, and that his task – to break out of his isolation and communicate the truths that he has discovered for himself to his readers – is one of intense difficulty. (60)

芸術家の使命というものは、真実（あるいは真理）を読者に伝えることを表明している。もちろんコンラッドが強い運命論者であるということではなく、むしろ長年船員生活を経験し、狭い世界の中にも秩序があり守らなくてはいけないという思想的なものが身につけているのではと感じさせられる点が多々ある。『ナーシサス号の黒人』自体が船内の秩序が乱されそうになる一種の奇怪な物語でもある。また短編の「青春」や中編の『台風』、『シャドウライン』 (*The Shadow Line*, 1917) なども船と自己の秩序、それを破壊しようとする環境との戦いのストーリーである。

以上の事を整理してみると、コンラッドの物語はその多くが悲劇であり、その根本の原因は様々な異なる背景における誤解であり、またその結果生じる（意図的であるか否かにかかわらず）裏切りである事が理解できる。「マレーもの」にかかわらずこの構図は見受けられるので、コンラッド作品全体に及ぶテーマと言えるであろう。南米が舞台となる作品『ノストローモ』 (*Nostromo*, 1904) に関しては、主人公のノストローモ (Nostromo) 自身はイタリア系の移民という文化的な背景を担っており、リビエラ (Ribiera) 大統領の下で政府寄りの軍事的な活動を行っている。彼は本来一本気の勇敢な人物として描かれ、自分の生き方と活動に関しても誇りを持っていた。しかしあることがきっかけで自分の存在を政府も軍も大してあてにしていなないと思こむようになり、最終的に軍資金として隠しておいた銀を盗むという罪を犯してしまう。これなども文化の軋轢がもととなった裏切り行為と捉えることができる。また短編に「ガスパー・ルイス」 ("Gaspar Ruiz", 1908) があるが、現地の若者ガスパー・ルイス (Gaspar Ruiz) が大した理由もなくサンティエラ (Santierra) 将軍率いる共和軍（独立派）に入るが、王党派の女性ドニャ・エルミニア (Doña Erminia) と運命的な出会いをして最終的に王党派の軍の首領として活躍するという展開になる。彼の場合も様々な文化の軋轢を背景に共和派に対しては裏切り行為を犯すことになる。また前半にも言及した『密偵』と『西欧人の眼に』についても優柔不断で小市民的

な主人公が、アナーキズムというコンラッドにとっては忌み嫌うべき異質の要因によって人生を狂わされる話である。両者の話は根本的に主人公達の性格的な弱点が招いた悲劇と言えるが、裏切りにも様々な要因がある点を示しており、コンラッドの悲劇には欠かせない部分であることが分かる。

「渦」に関しては先ほども言及したとおり、自分自身の生き方に対する信念のために主人を裏切り弟を死なせてしまうストーリーである。ある意味では意図的であり、また運命の糸に繰られた結果であるとも言える。しかしこの裏切りという要素によって、このストーリーと主人公アーサットの異質性という部分が強調され、ひいては異文化的な軋轢と悲劇に読者の目を向けることに繋がっているのである。一日の物語の大半は彼の妻ディアメレンと暮らすことになった経緯と彼女が死の床で今にも息絶えそうな様子を「私」と二人で見守っている描写である。彼の裏切り行為がなければ全ての要素は存在せず、また迫力に欠ける内容となってしまう。早朝にディアメレンが息絶えるとアーサットが「何も見えない」とつぶやき「私」は「何もないのだ」と応じる。このやりとりを見てもこの話全体が彼の信念に基づく裏切り行為、妻を略奪するための行為から始まり彼女の死で全てが終焉する事を物語っている。

7. 物語における「許し」の問題

コンラッドの物語の終わりには不思議な安堵感が漂う場合が多い。悲劇であるにもかかわらず、ある種の終息感や安心感が登場していることに気づく。たとえば『ロード・ジム』に関しては、最後はジムの失策で死亡した親友デイン・ワリス (Dain Waris) の父親ドラミン (Doramin) の手によりジムは撃たれて死ぬ設定となっているが、ジムはすでに死を覚悟していたのであり、最後に自分の運命から決して逃げようとはしなかった。いわば自分を見つめて悟りを得た状況が彼の行動の基となり、彼の確固とした人間的成長、また人生観を語っているわけである。そうした悟りの境地が物語の終焉の安堵感を生み出している。また『ノストローモ』については最後に彼が婚約していた娘リンダ (Linda) の父親ヴィオラ (Viola) に別人と間違われて撃たれる結末となるが、自分の罪を反省し、知人のモニガム (Monygham) 医師が「ノストローモの魂の声が湾の暗闇全体を支配することを感じた」という場面で終焉をむかえる。これも一種の悟りと言えよう。『西欧人の眼に』においてはテロリストによって聴覚を奪われたラズーモフ (Razumov) が再びロシアの地に戻り、献身的な女性テクラ (Tekla) の看病を受けて療養し、静かに快復を待つという場面が挿入されている。夢と聴覚を失った彼が最後に本当の静寂を得たことは皮肉であるが、ラズーモフの心は物語の中で始めて静寂と心の平穏を得たことが語られる。これもある意味で悟りの境地なのである。

また別の形での「救い」あるいは「許し」のパターンとしては、子供の存在が意味をも

つ場合もある。たとえば「エイミー・ファオスター」においては夫ヤンコーが病没した後、エイミーは忘れ形見の子にジョニー (Jonny) という夫の名にちなんだ名前を付けて愛情を注ぐ。この場合は生前の誤解やわだかまりを忘れて子供に未来を託す、あるいは異文化の無理解や軋轢をお互いの子供が解決するための象徴として描かれているとも解釈できる。「ガスパー・ルイス」においてもガスパー・ルイスとドナ・エルミアの娘が敵方のサンティエラ將軍に託されて養女として成長するという結末が描かれているが、この場合にも互いのわだかまりが最終的に子供によって瓦解することを暗示していると考えられる。

これらの作品とは別に、はっきりとした主人公達の最期の心情が語られていない物語も確かにある。たとえば『島の流れ者』に関しては、ウォレムズは愛人のアイーサによる誤解のために射殺され、『密偵』のヴァーロックは妻ウィニー (Winnie) からの恨みにより刺殺される。しかしこのような結末にはコンラッドの意図的な告発のメッセージが込められているのである。『密偵』の場合には、ヴァーロックの他に、テロリスト仲間の希望のない未来が暗示されて物語が終わり、アナーキズムに対する強い非難のメッセージが込められ、『島の流れ者』に関しても「文明の前哨地」と同様に無責任な西欧文明の進出を象徴的に揶揄しているのである。これらは読者がそのメッセージを読み解かねばならないが、そうすることにより主人公達の死が無駄になっていないことが分かるのである。

様々な物語終焉のパターンがあることは確かであるが、コンラッドの作品全体を通して、異文化の軋轢と誤解という問題に関しては、最終的に作家の理解と解決への願いが込められているわけである。突き放したような、また意図的に救いを与えないような結末もあるが、それはディストピアを描いてユートピアを願い、反面教師を描いて道徳を暗示することと同様に、作家の反意的なメッセージが込められていると考えられるのである。そうした意味でコンラッドの最終的なメッセージを考慮することにより、どのような形で「許し」は存在するのかという点を考えることが読者にとって有益なのである。

以上の点を総合して「渦」における結末を考察すると、「私」とアーサットのやりとりの中で、

"I can see nothing," he said half aloud to himself.

"There is nothing," said the white man, moving to the edge of the platform and waving his hand to his boat. A shout came faintly over the lagoon and the sampan began to glide towards the abode of the friend of ghosts. (203)

このような暗い心情を吐露する部分があるが、それに続いて、

The white man, leaning with both arms over the grass roof of the little cabin, looked back at the shining ripple of the boat's wake. Before the sampan passed out of the

lagoon into the creek he lifted his eyes. Arsat had not moved. He stood lonely in the searching sunshine; and he looked beyond the great light of a cloudless day into the darkness of a world of illusions. (204)

以上のような「私」による描写が続く。アーサットは美しい朝日に包まれているが、その背後には幻影の不安がつきまとっている。現実の世界を陽光として、彼の不可思議な人生を闇として暗示していることが窺える。しかし「私」は、全てを失ったアーサットが現実の陽があたる世界で新しい人生を歩むことを願っているのである。

8. むすび

「潟」は短編集の序文に示されているように、その中では最初に書かれたものである。そうした意味で『オールメイヤー』や『島の流れ者』といった「マレーもの」の直後に完成された、作家も述べている通り一番早く書かれた短編ということになる。従ってマレー地方の風土や印象を短く要約した内容を持つ作品と言ってもよかろう。そうした意味でその特徴をよくとらえていることは当然であるが、以上に述べたとおり、場面設定の特徴や異文化の遭遇と軋轢、またそれにまつわる誤解や裏切り、最終的な許しの問題等、「マレーもの」やその他の作品群に当てはまる特色をほとんど全て含んでいる作品と言っても過言ではない。『不安にまつわる物語』は「カレイン」や「文明の前哨地」といった問題作を含む短編集であるが、その中の一番シンプルで短い作品である「潟」は、最初に書かれたコンラッドの「不安」を描く手法の原点を示す作品として興味深い内容を含んでいる。

Works Cited

Batchelor, John. *The Life of Joseph Conrad*. Blackwell Critical Biographies. Oxford: Blackwell. 1994.

Conrad, Joseph. "The Lagoon", *The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad*. Vol.1. London: Gresham, 1925.

---. *Tales of Unrest, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad*. Vol.1. London: Gresham, 1925.

Dowden, Wilfred S. *Joseph Conrad: The Imaged Style*. Nashville: Vanderbilt UP. 1970.

Fraser, Gail. "The Short Fiction." Ed. I.H Stape. *The Cambridge Companion of Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP. 1996.

GoGwilt, Christopher. *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double-Mapping of*

- Europe and Empire*. Stanford: Stanford UP. 1995.
- Humphries, Reynolds. "Karain: A Memory. How to Spin a Yarn." Ed. Keith Carabine, *Joseph Conrad: Critical Assessments*. The Helm Information: Critical Assessments of Writers in English. Mountfield: Helm Information. 1992.
- Karl, Frederick Karl. *A Reader's Guide to Joseph Conrad*. Rev. ed. New York: Syracuse UP. 1997.
- Knowles, Owen and Gene M. Moor, eds. *Oxford Reader's Companion to Conrad*. Oxford: Oxford UP. 2000.
- Mann, Thomas. "Preface to *The Secret Agent*." Ed. Keith Carabine, *Joseph Conrad: Critical Assessments*. The Helm Information: Critical Assessments of Writers in English. Mountfield: Helm Information. 1992.
- Mclauchen, Juliet. "Conrad's 'Decivilized' Cities." Ed. Gene M. Moore. *Conrad's Cities: Essays for Hans van Marle*. Amsterdam: Rodopi. 1992.
- Peters, John G. *The Cambridge Introduction to Joseph Conrad*. Cambridge Introductions to Literature. Cambridge: Cambridge UP. 2006.
- Watt, Cedric. "Conrad and the Myth of the Monstrous Town." Ed. Gene M. Moore. *Conrad's Cities: Essays for Hans van Marle*. Amsterdam: Rodopi. 1992.
- Yeow, Agnes. S.K. *Conrad's Eastern Vision: A Vain and Floating Appearance*. Houndmills: Palgrave Macmillan. 2009.